

# YUMI HAMAO PIANO RECITAL

## 浜尾夕美ピアノリサイタル

ラフマニノフ生誕150周年に捧ぐ

ラフマニノフ 幻想小曲集 作品3より 1. 悲歌

S. Rachmaninoff *Morceaux de fantasia Op.3 No.1 Elégie*

ラフマニノフ 10の前奏曲 作品23より 2. 変ロ長調 3. ニ短調 5. ト短調

S. Rachmaninoff *10 Preludes Op.23 No.2 B Flat major, No.3 D minor, No.5 G minor*

13の前奏曲 作品32より 5. ト長調 10. ロ短調

*13 Preludes Op.32 No.5 G major, No.10 B minor*

メトネル 忘れられた調べ 第2集 作品39より

3. 春 4. 朝の歌 5. 悲劇的ソナタ

N. Medtner *Vergessene Weisen Zyklus II Op.39*

*No.3 Primavera, No.4 Canzona matinata, No.5 Sonata tragica*



クライスラー=ラフマニノフ 愛の悲しみ

F. Kreisler - S. Rachmaninoff *Liebesleid*

愛の喜び

*Liebesfreud*

ラフマニノフ コレリの主題による変奏曲 作品42

S. Rachmaninoff *Variations on a Theme of Corelli Op.42*

この演奏会は2023年度国立音楽大学個人研究費(特別支給)の助成を受けています

2023年9月17日 日 14:00開演 (13:30開場)

銀座 王子ホール(東京Metro銀座駅) 03-3564-0200

全自由席 一般¥4,000 学生¥3,000(25歳まで) ※未就学児はご入場できません

前売 ■ チケットぴあ [t.pia.jp](http://t.pia.jp) (Pコード 238-261)

C Nプレイガイド [www.cnplayguide.com](http://www.cnplayguide.com) 0570-08-9990

王子ホールチケットセンター 03-3567-9990 (土日祝を除く 10:00 ~ 18:00)

後援 ■ 日本音楽舞踊会議

お問合せ・ご予約・マネジメント ■ Shin'En 新演コンサート 03-6384-2498 [www.shin-en.jp](http://www.shin-en.jp)



チケットぴあ



新演コンサート

【プロフィール】国立音楽大学卒業、同大学大学院修了。ピアノを池沢幹男、池沢朗子、高野耀子、飯田玲子、ヘルムート・バルト、レモ・レモリの各氏に師事。京都フランス音楽アカデミーにて、テオドール・パラスキヴェスコ氏に師事。ウィーンにて、パウル・パドゥラ=スゴダ、インゴマー・ライナーの各氏に指導を受ける。“反核：日本の音楽家たち”フレッシュコンサート、国際芸術連盟新人推薦コンサートに出演。独創的なテーマで作品の核心に迫るソロリサイタルは、毎回好評を博している。ポーランド国立クラクフ室内管弦楽団、九州交響楽団と共演。その他アンサンブル、コンクール審査、YAMAHA ピアノコンサートグレードのアドバイザーなど幅広く活動。2003年より日本音楽舞踊会議会員として「20世紀以降の音楽とその潮流、様々な音の風景」と題したシリーズ演奏会に度々出演し、ソロの他、声楽の伴奏やバレエとのコラボレーションなど邦人作品の初演にも意欲的に取り組んでいる。筑波大学附属盲学校音楽科教諭(ピアノ)を経て、現在、国立音楽大学教授。

### リサイタル評(抜粋)

『音楽現代』2020年3月号より

「邦人“昇龍”ピアニスト12人を推す」浅岡弘和

マニャックな選曲と独自の表現で常に聴衆を魅了する実力派の中堅ピアニスト。(中略) 郷愁に満ちたロシアピアニズムの軌跡が明らかにされ、最後のグラスノフ「ピアノ・ソナタ第1番」はロマンの大河のような溢れる情感といい、浜尾の演奏も聖なるロシアへの憧憬を強く感じさせ技巧的にも間然するところのない名演。

『音楽の世界』2018年秋号より

リスト「ハンガリー狂詩曲第12番嬰ハ短調」が弾かれ、第一級のヴィルトゥオーソらしく高音から低音までよどみなく、豪快でさらびやかなピアノが聴けたが、ことに高音の愉快的な響きは最高だった。(浅岡弘和記)

『音楽現代』2018年11月号より

～ノスタルジア～ 2018年9月9日 Hakuju ホール

グリムカ=バラキレフ「ひばり」は、主旋律の合間を縫って儚げに立ちのぼる部分の浮遊感が美しい。原曲の詩の世界へといざなわれた。グラスノフ「ソナタ第1番」1楽章は、心の奥底から湧き上がる声が聴こえてくる。不安を掻き立てられる始まりから、優しく歌われる第2主題、白熱していくクライマックスへと壮大なドラマが奏でられた。(津嶋りえ記)

『ムジカノーヴァ』2015年12月号より

各曲、性格の異なる短編を的確かつ素の姿で描いていく。リズム・音響・熱量それぞれが、彼女の持つ自然で穏やかな時間の中に嬉しそうに浸っている。(プロコフィエフ「束の間の幻影」)(時 幹雄記)